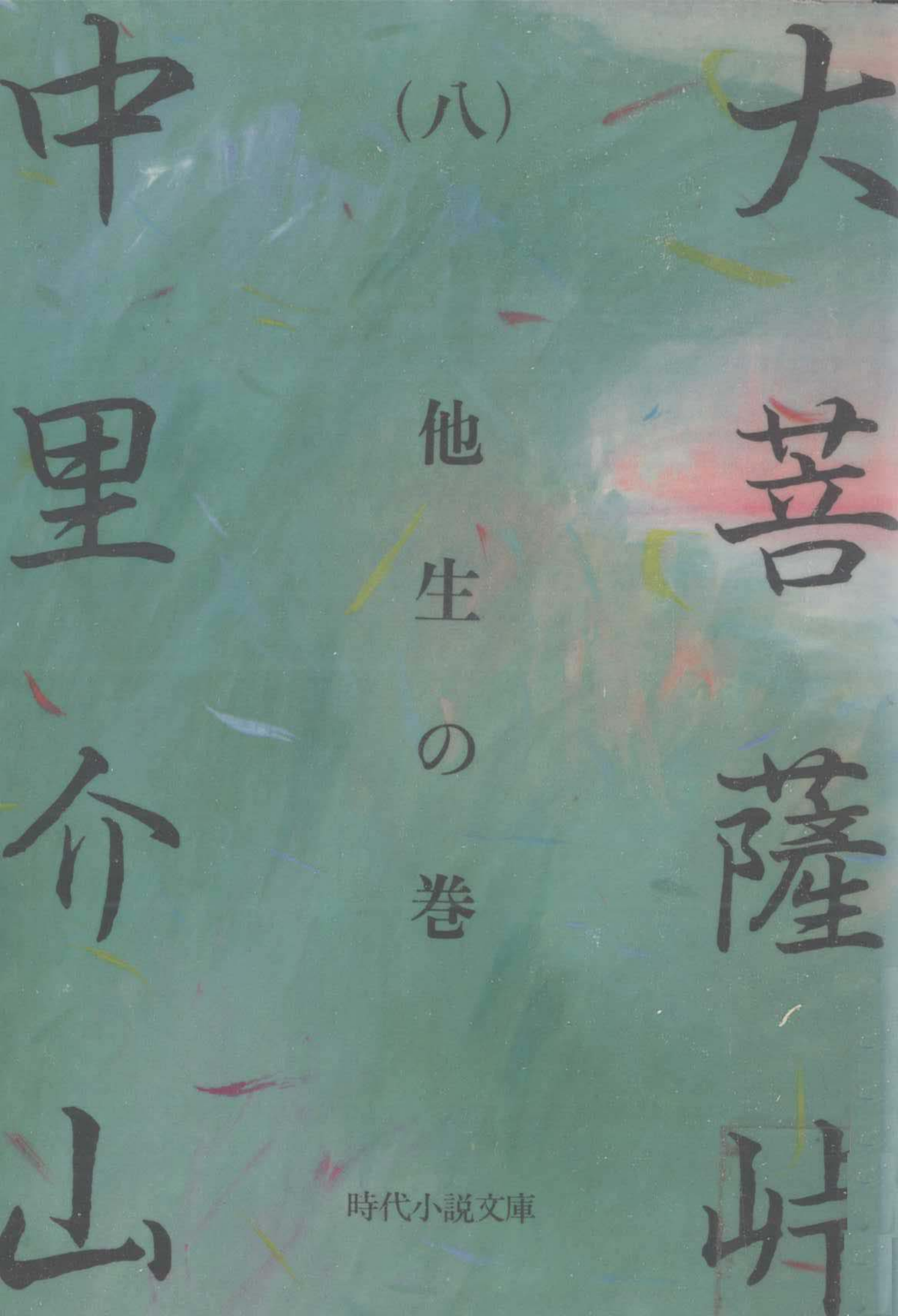




中

(八)

大

里

他

菩

生

介

の

薩

山

卷

峠

時代小説文庫

時代小説文庫 8

大菩薩峠 (八) 他生の巻 全二十冊

昭和五十六年十月三十日 初版発行

著者 中里介山

発行者 原 秀行

発行所 株式会社富士見書房

東京都千代田区富士見一十二―十四

電話東京二六一―五三七五(代表)

〒一〇二 振替東京⑦八六〇四四

印刷所 暁印刷 製本所 大谷製本

装幀者 熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-600108-7440(0)

時代小説文庫

8



富士見書房

大菩薩峠

(八)

他生の巻 中里介山

目次

白骨の巻（つづき）

七

他生の巻

一三〇

大河小説『大菩薩峠』の世界

白井佳夫 四〇七

大菩薩峠

(八)

他生の巻

白骨の巻（つづき）

五

一方い、の、じ、ヶ原を再び後へ戻ったところ、峠の上の立場、五条源治の茶屋は、この時、上を下への大騒ぎであります。

それは外でもない、ここへ、さい、ぜ、ん、出立した四人が舞い戻って来たからです。しかもその中の二人の者が、血に染みた二人の者をつぎ込んで来たからであります。

丸山勇仙は高部弥三次を肩にかけ、仏頂寺弥助は三谷一馬を引き背負って、この茶屋へかけ込みました。

それによって見ると、負傷したのは二人で、負傷しないのが二人。負傷の程度はドノくらいか知らないが、二人とも、身動きも出来ないのを、ともかく、応急の血留めをして、ここへ担ぎ込み、仏頂寺弥助は、はげしく店の者を追いまわして、蒲団の上にゴザを敷いて、ともかくも、その上へ二人の負傷者を横たえる。丸山勇仙は刀の提げ緒を取って襷にかけ、

「亭主、大急ぎ、焼酎と畳針を心配してくれ、それに麻糸と晒」

といいつけるのを仏頂寺弥助が押つかぶせて、
「なければどこぞ近いところへ人を走らせて、焼酎と畳針と、それから麻糸に晒……この傷を縫い合わせるのだ」

とわめきました。

そこで、顛倒して店のものが、また大騒ぎで、家中を探しにかかる、いいあんばいに、焼酎はかなり豊富に蓄えられてあるし、麻糸も人間を縫う程度には蔵われてあったし、少々、錆びてはいたけれども、相応の畳針まであったのを取り揃えて差し出すと、

「有難い、あつらえ向きの品が全部揃っていた」

丸山勇仙は、焼酎の壺を取り上げました。この男は医術の心がけがある。そこで、負傷者のために、救急療治として、その傷口をまず焼酎で洗い、次にこの畳針で縫合せの手術に取りかかるのは心得たものです。仏頂寺弥助は、それに介添えとして働き、かなりの時間を費やして、ともかくも、二人の傷を縫い了って、体中を、晒ですっかり巻いてしまってから、

「仏頂寺、一体これはどうしたというものだ」

と丸山勇仙が、仏頂寺弥助にたずねると、

「おれにもわからない」

仏頂寺弥助は、投げ出したような返事。

「あれは、一体、本当に盲目なのか」

丸山が重ねてなじると、仏頂寺は、

「本物らしい」

「して見れば、君たち三人が、まとまって、遂に一人の盲人のために不覚を取ったという理窟になる——いや、理窟ならまだいいが、現実このとおりの始末、剣術というものは、本来、それほど段のあるものか」

「ううん、それをいわれると面目ないが……」

と仏頂寺弥助はうなり出して、じっと考え込んでいたが、

「術には、さほどの相違もあるまいが、出ようが悪かったのだ」

「出ようが悪い——それは向こうのいうことだろう、向こうは眼が見えないのだぜ」

「眼は見えないけれども、あれは心得たものじゃ、真剣の立合いでは神しんに入っている、まさに驚くべきものじゃ」

「盲目で……」

「眼の開いた奴の仕事は大抵見当がつくが、眼の見えない奴の構えは測ることが出来ない、一時、おれは、あいつの構えを見て、ズウッと骨まで寒くなったよ、その瞬間だ、出てくれないければいいがと思っている三谷が出てしまった、出たのじゃない、引き寄せられたのだ、そこで案の如く斬られてしまった、あれは眼の開いた奴には出来ない芸当だ、あの引き寄せる力が眼開めあきにはない、おれも今まで随分、命知らずと戦った、また千葉の小天狗てんぐ柴次郎殿や、練兵館の飲之助のすけ殿（斎藤弥九郎の次男飲之助、弱年じやくねんにして鬼飲おにかんの名を得たり）は怖おそろしい相手だと思うが、それは怖しくとも眼が開いている」

「眼開きは不自由なものだと、塙はなわ検校けんぎょうが言った」
丸山はカラカラと笑ったが、仏頂寺は浮かない。

また一方、この日の朝まだき、下諏訪しもすわの秋宮あきのみやの社前は、まがいものの鹿島かしまの事触ことふれが、殊勝しゅしょうらしく、

「さて弘ひろめまするところは神慮しんりょ神事かみごとなり、国は坂東ばんとうの総社常陸そうしやひたちの国、鹿島大神宮の事触れでござる、さて鹿島大神宮の一年の御神事は、七十二度の御神事、七度の御祭礼とござって、いきがい、おきどり、湯様ゆためしの御神事と申して、一天地の容題ようだいを申してまかり通る、当年はすなわち天に陽明とござって、日照りが六分……」

七ツ下がりに、その日の先触れをするような文句を唱えながら、通りかかって、あっと面かおの色を変えました。

というのは、その社前の立木を汚けがして、一人の女が縊くひれていたからです。

鹿島の事触れは、これを見ると立ちすくんで、大声をあげて人を呼びました。

そこで、たちまち人が集まって、その縊れっ子を調べてみると、それはこの温泉駅では誰も知っている物売りのお六でありましたから、一層騒ぎが大きくなりました。

そこで、評判と臆測おくそくが、たちまち町中一ぱいにひろがりました。

あの愛嬌あいぎやうもの者が、どうしてこんなことを仕出かしたのか。孫次郎の宿で聞いてみると、昨晚遅く目の色を変えて飛び出したのが変だとは思ったが、それはお万殿の時刻までにと、大あわてにあ

わてて、自分の家へ帰ったのであらうとばかり思っていたが、そういわれると思ひ当ることがないでもないといっています。

しかし、この女が、縊れて死なねばならぬ事情というのは、誰にも、どうしても思ひ当たらない。

竹細工師で情夫とも御亭主ともなっている、気のよい男をただしてみても、一向あたりがつかない。

そこで、当然、魔がさしたのだ。その魔がさしたのは、いましめを忘れて、お万殿のお詣りの時間を犯し、その怒りに触れたために、この始末だろうという説が最も有力でありました。

死骸は一通り検視を受けた上に、ともかく、間近の孫次郎の宿の一室へ引き取られて、そこへ静かに横にして置きますと、丁度、来合わせた巫女があります。

宿の女中たちは、巫女を呼んで、この女のために口よせを頼み、その非業の魂をやわらげるとともに、無告の訴えを幽冥界から聞こうとしました。巫女は心得て、檜の葉に水を手向けて、あずさの弓を鳴らし、

「そもそもつつしみ、うやまうやまうて申したてまつるは、上に梵天帝釈四天王、下界に至れば閻魔法王……」

もっともらしく神おろしをはじめたが、時が時でしたから、笑う者がありませんでした。この口よせのいうことは、一向取りとまりはないが、その文句のうちに、「口惜しい悲しいで気が取りつめ」とか「この魂が跡を追いかけて引き戻してくる」とか「東は神宮寺、西は阿礼の

社やしろより向こうへは通さぬ」とか、髪をふり乱し、五体をわななかせ、油汗を流して、呪のろわしい言葉ことばを口走っている。それを正直に女中たちは、身の毛をよだてて怖れている。その時どうしたのか、急にこの席を外して立ったのが、この宿の番頭で、まっくろい面かおをしながら、うろたえて帳場へ戻って坐り込んだが、落着かないで、物につかれたように眼を据えている。

昨晚、女が血相変えて飛び出したのを、留めてみたのもこの番頭で、あの前後のことを薄々知っているから、ただ今の巫女いもこの出鱈目でたらめがこの上もなく気になって、席に堪えられなくなったものと見える。

番頭がぼんやりして帳場へ坐り込んでいるところへ、今朝早立ちをした仏頂寺弥助が先に立ち、後ろには戸板に人を載せて人足に担がせて、ドヤドヤと店頭へ入り込み、

「塩尻峠の上でちっとばかり怪我をしたから戻って来た、また厄介になるぞ」

番頭は、この時、面色めんしよくが土のようになり、よく戻っておいでになりましたともいいませんでした。

六

さてまたここは江戸の下谷の長者町、道庵先生は何を感じたものか、にわかに触れを廻して、子分のならず者や、近処のワイワイ連を呼び集めました。

何事ならんと馳せ集まった者どもを前に置いて、先生は薬研やげんの軸を斜しやに構え、

「皆様、早速お集まり下さいまして……」

先生としては、極めて鄭重^{ていじゆう}な物のいいぶりでしたから、集まったものが、少し容子が変だと思
いました。

変だと思ったのも無理はありません。こういう場合において先生は、いつも野郎ども呼ばわり
をして傍若無人^{ぼうじやくぶじん}に振舞うのに、今日に限って、皆様だの、お集まり下さいましてだのと、改まり
方が急激でしたから、集まったものも、あんまりいい気持がしませんでした。

けれども、何か、先生も急に発心^{はつしん}したことがあればこそ、こう殊勝に改まったものに相違ない
と思うから、皆、神妙にうけたまわっておりますと、先生はおもむろに、

「さて、皆様、実は拙者も、近頃悟るところがございまして、皆様の前で、今までの非を改め
るとともに、今後をお約束致しておきたいことがございます、それでお忙がしいところを、かく
お集まりを願った次第で……」

来会者が、いよいよオドかされてしまいましたけれども、先生は一向頓著^{とんじやく}なく、

「ええ、皆様も御承知のとおり、拙者もこれで医者^{はし}の端くれでございますが、医者は医者でも、
ただの医者だと思ふと了見^{りようけん}が違います」

「違えねえ」

そこへ、クサビを打ち込んだのが、一子分のデモ倉でありました。道庵先生は気取った面^{かお}をし
て、デモ倉の横顔^{いちはつ}に一瞥^{いちべつ}を与え、

「近頃の医者は、皆、学問も出来れば技^{わざ}も出来、したがって知行も沢山^{たくさん}取り、薬礼^みの実入^いりも
多分にあり、位も高くなるし、金も出来るのに、哀れやこの道庵は、今も昔も変らぬ、ただの十

八文……」

といって先生が、ホロリと涙を落しました。

「泣かなくなつたってもいいやな、先生、先生も酔興すいきようでやってるんだらう」

慰め顔に弥次をとばしたのが、やはりデモ倉であります。先生は、それに力を得て、

「ツイ愚痴ぐちが生まれて、まことにお恥ずかしい次第でございます、ただいま、申し上げるとおり、当節のお医者様は、皆学問も出来れば、技も出来、したがって知行も沢山取り、薬礼の実入りも多分にあり、位も高くなるし、金も出来るのに……」

「先生、わかつてるよ、そう繰りかえして愚痴をこぼしなさんなよ、了見を見られちまうじゃねえか」

忠義なる子分は聞きかねて、先生に忠告を与えても、先生は顧みる色なく、

「知行も沢山取り、薬礼の実入りも多分にあり、位も高くなるし、金も出来るけれども、いい子供が出来ねえ」

といい出しましたから、一同がまたキョトンとした顔です。そうすると、しょげていた道庵先生が少しくハズミ出して、

「さあ、そこへいくとこの道庵なんぞは大したもんだぜ、林子平しへいじゃねえが、親もなければ妻もなし、妻がなければあ子供のあるう道理がねえ、板木いたがねえから本を刷って売ること出来ねえ、このとおりピイピイしているから金なんぞは倒さかさにふるつたつて出て来ねえんだ、だから、まだなかなか死にっこはねえよ、安心しろよ」

ここで美事に脱線してしまいました。初めは処女の如く、終りは醉漢の如く、すっかりボロ（ではない生地）を出してしまったのはぜひもないことで、こう来るだろうと思っているから、聴衆もさのみは驚きもしません。

しかし、先生はまたあらたまって、薬研の軸を取り直し、真面になって、

「ところで今日、こうしてお集まりを願ったのは、余の儀でもございません、最前も申し上げるとおり、拙者も近頃、つくづく自分の非を悟った点があるのでゲスから、その点を皆様の前で改めるとともに、一つのお約束を致しておきてえんだよ」

おきてえんだよ……が少し納まらない。

道庵先生ほどのものが、自分の非をさとして、それを公衆の前で懺悔するとともに、かつ、今後の実行に現わして約束をしようというのは、よほどの道徳的勇氣がなければ出来ないことです。けれども、ここに集まっているやからに、道徳的勇氣なんぞの呑み込める面は一つもないのであります。ないからといって、先生は少しもそれを輕蔑するような風情はなく、諄々として説きはじめました。

「その昔、奈良朝のころに、帝の御病氣のお召にあずかった坊主で、医者兼ねた何とかいう奴があったが、車に乗せられて帝の御所へいそぐ途中に、見るもあわれな乞食が路傍で病氣に苦しんでいたものだ、それを件の坊主で医者兼ねた奴が見ると、車から飛んで降りて、その乞食を介抱して、とうとう帝のお召をわすれてしまったという奴がある……ところでまた、おれの先祖には、お百姓の病氣を癒しても十八文、二代將軍の病氣を癒しても十八文しきや薬礼を取らな